

IMAGICA ポストプロダクション・サービスにおいて 波形ラスタライザ WVR7100 型を採用し、編集作業の効率を向上



■ 概要

課題	TV番組の編集では、色調を合わせるための絶対評価、また信号レベルの確認のために波形モニタを使用するが、従来のラスタライザ型波形モニタでは十分な波形再現性、解像度が得られなかった。
ソリューション	WVR7100型を採用することで、波形再現性、解像度が改善され、詳細なビデオ信号の監視が可能になった。
利点	詳細な信号監視が可能になったことで、完パケ(出来上がったテープ)の信号品質が確かなものになる。また、直感的なユーザ・インタフェースにより、編集作業がストレスなく行える。

■ 背景 ■

TV番組の編集プロセスへの様々な要求

株式会社 IMAGICA は、1935年に日本初の映画フィルムラボ「極東現像所」として設立された。映像加工処理事業を中心に、劇場映画からテレビ放送、ビデオ、DVD、あるいはアナログからデジタルへの映像技術変化にいち早く取り組み、映像の世界を「技術」でサポートしている。HD対応において日本でも先駆的な存在であるIMAGICA 赤坂ビデオセンターではTV番組等の編集を担当し、リニア、ノンリニアを含むHD(High Definition: 高精細)、SD(Standard Definition: 標準解像度)、HD/SDマルチ、およびMA(マルチオーディオ)室を数多く設け、多様化・高度化する番組演出にも柔軟に対応している。

一般に、TV番組の素材が収録されると、各素材を整理して番組で使用する映像部分を大まかに切り出す「荒編集(あらへんしゅう)」を行った後、放送尺に合わせて調整が行われる。この段階で演出意図にしたがって特殊効果を施したり、文字スーパー、子画面、タイトル・スタップロールなども付加する。この作業の後、背景音楽や効果音、ナレーション等の音入れ作業(MA)が行われる。このようなポストプロダクション作業では、制作者の意図を汲み取り、迅速に映像の合成や特殊効果を実現する技術が要求されるだけでなく、映像の質に対する鑑識眼や映像のつなぎの間をはかるセンスなども要求される。

■ 課題 ■

波形モニタの残像と不十分な解像度

編集室で使用される波形モニタは、色調合わせの絶対評価、あるいは信号レベルの管理等に必須の計測器となっている。CRTを使った波形モニタは優れた波形再現性を持っている一方で、CRTの経年変化により、表示される波形のフォーカスが劣化する。また、一つの筐体で実現できる機能の数も限られているため、必要な波形を表示するためにはいくつもの計測器が必要になり、編集卓のスペースが犠牲になる。

近年、マルチディスプレイ化に対応する映像信号波形モニタである波形ラスタライザが普及してきた。IMAGICAでも他社製品のラスタライザ型波形モニタを使用していたが、表示される波形に残像があり、解像度も低いため、詳細な情報が読み取れなかった。さらに、操作パネルの使い勝手が良くないため、編集作業のストレスの要因にもなっていた。

■ 機種選択とその理由 ■

高い波形再現性と解像度

今回採用された テクトロニクスの WVR7100 型は、標準で HD-SDI 信号、オプションで SD-SDI 信号およびコンポジット・アナログ信号にも対応できる波形ラスタライザである。高解像度 XGA ディスプレイ出力が可能であり、4台分のモニタリングを一台で実現する、4画面タイル表示が可能な FlexVu[®] 表示機能も搭載している。



株式会社 IMAGICA
テレビ本部
赤坂テレビ制作部
技術グループ課長
岩立 登志雄様

株式会社 IMAGICA テレビ本部 赤坂テレビ制作部技術グループ課長 岩立 登志雄様に WVR7100 型の選定理由をお聞きしたところ「編集作業ではビデオ信号の細かな情報をモニターするために、それに応えてくれる高い再現性と解像度が必要だった。トライアルしてみたところ、WVR7100 型は、この要求を満たすものであった」とのこと。さらに、「直感的に操作できるという点でも編集作業のストレスが軽減された」とのコメントをいただいた。

WVR7100 型は、テクトロニクスのオシロスコープで培われたテクノロジーを活用し、アナログ CRT による表示をデジタル技術で実現している。また、表示する波形を任意に組み合わせることが可能な FlexVu 表示により、アプリケーションに最適な表示方法をカスタマイズできる。さらに、ユーザの要望を反映させた設計により、直感的で使いやすいユーザ・インタフェースを実現している。

WVR7100 型は、テクトロニクスが特許を持つ事実上の業界標準、ガマツ表示(ダイヤモンド、スプリット・ダイヤモンド、アローヘッド)が行える唯一の HD ラスタライザであり、ガマツ表示によりコンポーネントやコンポジットのカラー領域において、放送信号を適切なガマツ範囲に収めることができる。IMAGICA 赤坂ビデオセンターでは、この WVR7100 型を 6 台採用されている。



編集卓に組み込まれた WVR7100 型

■ 今後の展望 ■

ノンリニア編集を視野に入れた設備の拡充

IMAGICA 赤坂ビデオセンターでは主に TV 番組の編集を行っており、番組の性格上、リニアによる編集が多い。今後のビジネス展開をお聞きしたところ、「ノンリニア編集も視野に入れながら設備の拡充を図りたい。テレビ技術がアナログからデジタルに、SD から HD に変わり、編集がリニア、ノンリニアと複雑になろうとも、TV 番組の演出家の意図するところを実現するよう、常に最新の技術を取り入れながら対応したい」とのこと。

編集室の設備、調度やオリジナルの編集卓にも IMAGICA ならではのこだわりが見られ、業界のリーダーとして、お客様のニーズに応じた先進的なサービスを提供し続けてきた、実績に裏打ちされた信頼性の高さがうかがえる。



「WVR7100 型には優れた波形再現性、表示解像度がありますが、アナログ CRT の再現性に比べれば、まだまだ改善の余地がありますね」と、厳しい要求をおだやかな笑顔で話される岩立様からは、技術への深い造詣と、テクトロニクスに寄せる大きな期待を感じることができた。